

# 中学校国語科における生徒の実態は握

— その方法と実態の一側面 —

第1研修部 猪 狩 貞 一

## 1. はじめに

新しく教科担任となった時、生徒のようすを知るために指導要録を開く。その中で、ある生徒の国語科の評定が「3」であり、観点の「読むこと」に×がついていたとしたら、その生徒をどう考えるであろうか。

「読めない」といっても、読みの力のどの面に欠陥があるのだろうか。読字力が乏しいのか、読解力が劣るのか、それとも、読みの速度がおそいのか……。さらに、その原因は知能的なものなのか、性格的、身体的、家庭的、教育的要因のうちどこにあるのだろうか。

学校教育の主目的が学力をつけるにあるとき、指導のスタートはここにある。「地域や学校の実態、生徒の実態に即し、学年の目標や内容によって、学習活動を年間にわたって設定する。」(文部省 中学校指導書国語編)とあるのも当然である。

ここでは、「生徒の実態」とは具体的にどんなことなのか、また、高等学校では新入生の国語力をどうみているのかを述べ、年間指導計画の作成や修正上の参考に供したい。

## 2. 生徒の実態は握の方法

### (1) 一般的な実態は握の方法

#### ① 知能テスト

国語の成績があがらない場合、知能との相関をみる必要がある。つまり、学習指導は、生徒の知能の水準を知らなくては、円滑に、効果的に進めることは困難である。数値を絶対視はできないが、このために利用されているのが知能検査である。

#### ② 学力テスト

生徒の学力のは握がひとりよがりにならないためには、標準化された学力テストの利用を考えるべきであろう。国語科の場合、学年別、観点別診断検査が使われており、学校によっては、読書力診断テストを行っているところもある。

#### ③ 学習習慣・学習態度テスト

優秀な知能をもちながら、それ相応の学力をもちえない生徒がいるが、これらは、学習習慣や学

習態度が好ましくない場合が多い。注意力、ノートのとり方、家庭での計画的な学習等の実態を知り、適切な助言によって改善させるために学習適応性検査などがある。

#### ④ 興味テスト

国語科に興味があれば、生徒はしぜんに力がいり、成績があがる。逆の場合は、勉強する気がせず、成績はさがる。したがって、学習に対する興味を調査し、興味欠けているところは、興味を喚起するような対策をたてれば、意欲的に学習するようになる。

#### ⑤ 性格テスト・環境テスト

学習に大きな影響をおよぼす性格や環境を調査するテストもあるが、内容については省略する。

以上、ことばをかえれば、学力を規定する要因をとらえるテストを挙げたわけであるが、一つのテストでいくつもの要因を調査することはできないから、それぞれ目的の異なるテストを組合せて利用することによって、より客観的な実態をとらえることが可能となるわけである。

しかし、時間と経費の制約もあり、すべてのテストを実施するわけにはいかない。したがって、年間評価計画をたて、計画的に実施すべきである。

### (2) 国語科としての実態は握の方法

① 生徒の言語経験を具体的に調査するため、東海大学の石井司氏には言語経験の自己評価の例として下表のようなものを挙げている。(中学一年生が入学当初に生徒自身で記入して、担任教師に提出する)

調査				年	月	日(曜日)
氏名						
第一学年		組	性別	生年月日		
1 特殊の言語経験について						
(1) 小学校六か年のうち、司会・進行係をしたことがあるかどうか。(ある、ない 以下同じ)						
(2) 学芸会・発表会などに出て話をしたことがあるかどうか。						
(3) 学級新聞・学校新聞・文集などの編集に参加したことがあるかどうか。						